

「歴史や考古学を身近に感じて欲しい。」

「ひたむきに研究に向き合っているたくさんの研究員がいることを知って欲しい。」
そんな思いからこの展覧会の企画は始まりました。

「骨ものがたり」という展覧会のタイトルには、

「骨の研究から見えてくる歴史の物語」と、

「骨を研究する舞台裏の物語」の

2つの「ものがたり」を届けたいという思いを込めています。

多くの人には、奈良文化財研究所の研究成果が、

どのような過程を経て導かれているのか見えにくいのが現状です。

しかし、その成果にたどり着くまでの舞台裏にこそ、

歴史を読み解くおもしろさや、研究員の熱意が見える「ものがたり」があり、

それを知ること、少し難しそうな歴史の話も

身近に感じられるようになると思います。

本展覧会が、「研究の舞台裏」といういつもとは違った視点から、

歴史や考古学の世界に興味を持ってもらうきっかけとなれば幸いです。

「骨ものがたり—環境考古学研究室のお仕事」ができるまでには、
様々な試行錯誤がありました。

環境考古研究の魅力や伝えたいメッセージを、どのようにかたちにしていったのか。
その舞台裏を「展示」「図録」「イベント」「広報物」に分けて紹介します。

さあ、もうひとつの「骨ものがたり」のはじまりです。

STORY

遺跡から出土した動物の骨や貝などの
調査・研究をおこなう環境考古学研究室。
その仕事を、6つの過程に分けて紹介します。

Process 1 出土する

|

Process 2 探し出す

|

Process 3 同定する

|

Process 4 観察する

|

Process 5 考察する

|

Process 6 記録する

さあ、「骨ものがたり」のはじまりです。

骨ものがたりのはじまり

「歴史や考古学を身近に感じて欲しい。」

「ひたむきに研究に向き合っている研究員がいることを知って欲しい。」

そんな思いからこの展示の企画は始まりました。

「骨ものがたり」という展覧会のタイトルは、

「骨の研究から見えてくる歴史の物語」と「骨を研究する舞台裏の物語」、

2つの「ものがたり」を届けたいという思いを込めてつけました。

これまで、奈良文化財研究所では、歴史をぬりかえるような研究成果を出してきましたが、こうした成果がどのような過程を経て導かれているのか、その現場は多くの人には見えにくいのが現状です。しかし、その成果にたどり着くまでの舞台裏にこそ、歴史を読み解くおもしろさや、研究員の熱意が感じられる「ものがたり」が隠れていると思います。そして、それを知ること、少し難しそうな歴史の話も身近に感じられるようになる気がしています。

いつもとは違った視点で、歴史や考古学の世界に

興味を持ってもらうきっかけになるような展示をつくりたい…

そんな思いから、骨ものがたり展の企画が始まりました。

—— 研究員を通して見えてきた世界。

私は学生時代に考古学を専門に学んでいなかったため、研究所で働き始めた頃は、発掘調査そのものだけでなく、使っている道具、扱っている資料、研究室の雰囲気など、目にするものの全てが新鮮で、興味深く感じました。その一方で、研究の専門性の高さから、正直、「難しくてよくわからない話」や「自分にはあまり関係のないこと」など、どこか距離を感じてしまうこともありました。

しかし、そんな私と考古学の距離を埋めてくれたのは、一緒に働いている研究員でした。日々の業務で様々な研究員と接するなかで、私がいけないことを質問すると、図や資料を使ってわかりやすく教えてくれる人ばかりで、研究員の口から語られる歴史の話はとてもおもしろく感じました。また、研究員の生き生きとした姿や目の輝きから、研究に対するひた向きの姿勢や熱意を感じました。そして、そんな研究員の存在を知れば知るほど、歴史や文化財研究の魅力に引き込まれ、難しくて少し遠い存在だった専門的な研究内容にも親しみを感じ、もっと色々なことを知りたいという気持ちになっていきました。

発掘調査や研究成果などは、その専門性の高さから、多くの人にとって馴染みがなく、魅力が届きにくいのが現状です。しかし、誰にでも理解しやすく、親しみやすいかたちに変えて発信することで、歴史や文化財が、より身近な存在になれるのではないかな…そんな私自身の経験も踏まえた思いが、骨ものがたり展で「わかりやすさ」を大切にしたいというコンセプトにつながったように思います。

—— 研究所のリアルな姿を写真で表現する。

2017年頃から写真室の飯田さんと一緒に、奈良文化財研究所の日々の調査研究の現場や作業のようすを写真で記録する仕事を担当するようになりました。この撮影では、単なる記録だけでなく、展覧会や広報などでも使えるような仕上がりを意識して撮影をおこないました。

撮影で様々な研究室をまわっていくうちに、仕事の内容や研究対象の幅広さだけでなく、「ああ、この道具をこんな風に使うんだ」とか「あの図面は、こういう場所で作られていたのか」など、研究室の「素」の姿が見えてきました。そして、このようなリアルな研究室の姿に、研究のおもしろさやユニークさが隠れていると感じました。撮影時にはその個性を大切に、魅力を最大限に引き出すことを大切にしました。

また、どうしたら魅力を写真に収められるのかを考えた結果、撮影をする私たちが研究内

容や被写体についてもしっかりと理解しなければ、思いやメッセージが伝わる写真にはならないこともわかりました。私たちがやっていることは単なる「撮影」ではあるけれど、研究の意義を理解し、届けたい内容を整理することで、言葉では伝えきれない研究員やスタッフのひた向きの思い、研究の魅力などを感じられる写真になるような気がしました。

このように、日々の調査研究のようすを写真で記録するという仕事を通して、奈良文化財研究所の業務や個々の研究室の魅力、そして、それを伝えることの大切さに確信が持てたことが、骨ものがたり展で「写真を大切にしたい」というひとつの軸の形成につながったように感じます。また、骨ものがたり展の企画段階で、私と飯田さんの間で撮りたい写真のイメージがしっかりと共有できていたことも、展覧会でたくさんの写真を活用できた大きなポイントだったと思います。

——「一緒に展覧会やりませんか？」

作業風景の撮影で、環境考古学研究室にも通うなかで、研究員の山崎さんから「環境考古学をテーマにした展覧会をやりませんか？」という提案をいただいたことが、骨ものがたり展企画のきっかけになりました。

環境考古学研究室は、奈良文化財研究所のなかでも、非日常感を感じる場所でした。初めて研究室に入った瞬間に独特の匂いがしたり（これは標本などの匂いだということを、後日知りました）、書類などを収納するキャビネットに動物の骨がたくさん並んでいたりと、ここで見られない光景に「こんな研究室があるのか!」と、とてもワクワクしたのを覚えています。また、研究室でおこなっている研究の楽しさや重要性をわかりやすく語れる研究員の山崎さんも、この研究室の魅力のひとつだと感じました。

骨ものがたりの企画段階では、私が感じたこのワクワク感や感動を多くの人と共有し、環境考古学研究室の魅力を感じてもらえるような、環境考古学研究室だからこそできる展覧会にしたいと思っていました。そこで、研究室にたくさんの骨が並んでいる風景や、骨に囲まれながら研究する姿など、特にユニークさが際立っている「研究の舞台裏」にスポットを当てることを展覧会の軸としました。そして、山崎さんだけでなくスタッフも気さくな人たちだったことから、研究室で働いている人が前面に出ることで、環境考古学という分野を広く発信しながらも、研究員との距離が近く、親しみを感じてもらえるような展覧会にするという方向で企画を進めていくことに決めました。

——展覧会をかたちにする。

骨ものがたり展をかたちにするうえで、普段から一緒に働く飛鳥資料館学芸室の研究員・スタッフの誰一人が欠けても展覧会はできませんでした。

解説パネルひとつをとっても、学芸室内で制作を担当してくれるスタッフがいたので、私のイメージ通りのものを作ることができました。展覧会のように複数のメンバーで何かをかたちにしていく仕事は、関係者間で価値観やイメージをどれだけ共有できているかが、その完成度に大きく影響します。学芸室では、見学した展覧会の情報や魅力的なデザインの本や雑誌など、良いと感じたことを意識的に共有し合うようにしています。このように、普段から価値観や目指す方向性を共有できていたことが、展覧会を企画する土台として大きく機能したように感じました。

また、学芸室にいる研究員の専門分野は考古学、建築史学、文化遺産マネジメントなどで、サポートスタッフも元家具職人や教員免許を持っている人など、様々なバックグラウンドを持つメンバーで構成されています。このように専門が異なる人が協力し合い、多角的な視点で検討することができたことも、より多くの方が楽しめる展覧会をつくるうえで重要なポイントであったように思います。

展覧会を終え、ふりかえてみると、準備期間中は「どんな展覧会にしたいのか」「ゴールやコンセプトを達成するために何をすべきなのか」など、悩んでいる時間の方が長かったように感じます。しかし、こうして展覧会としてかたちにすることができた裏には、飛鳥資料館学芸室だけでなく、環境考古学研究室や写真室、その他の研究室、そして所外の様々な方のご協力があったからにほかなりません。

たくさんの人と思いを共有しながら、心を込めてつくった骨ものがたり展。完成までは、日々検討を重ね、楽な1本道ではありませんでしたが、本書で私たちの取り組みを紹介することで、今後の文化財研究や活用などに資するものがあれば幸いです。

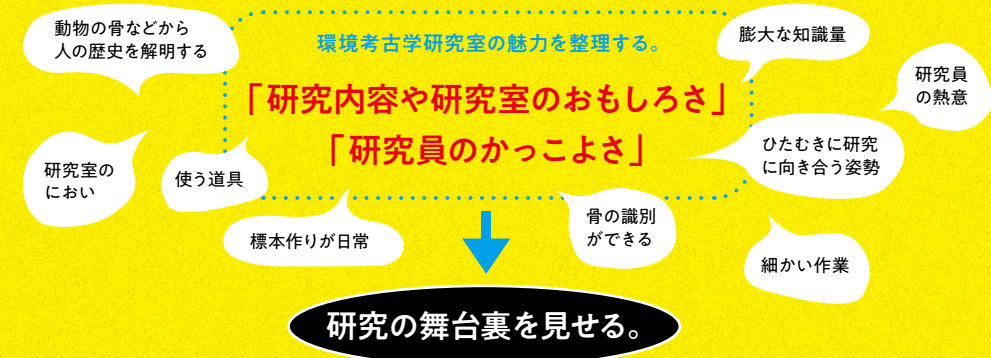
小沼 美結

（飛鳥資料館 学芸室）

What

展覧会で何を伝えたいのか？

環境考古学研究室の魅力を掘り下げ、私たちが何を大切に、何を伝えたいのかという部分を明確にしてみました。

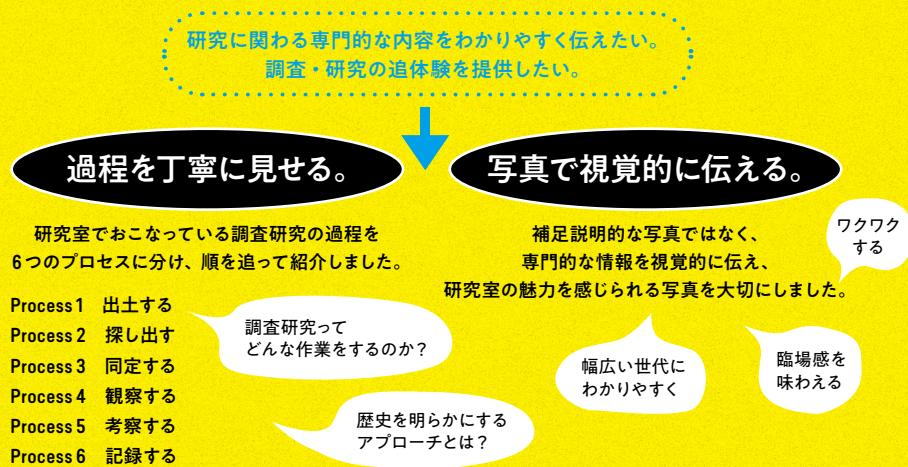


環境考古学研究室の魅力を以上の2つに整理しました。研究成果という「結果」の部分だけでなく、その成果にたどり着くまでの「過程」にこそ隠れているのではないかと考え、普段は見えない研究の舞台裏を見せることにしました。

How

どのようにして伝えるか？

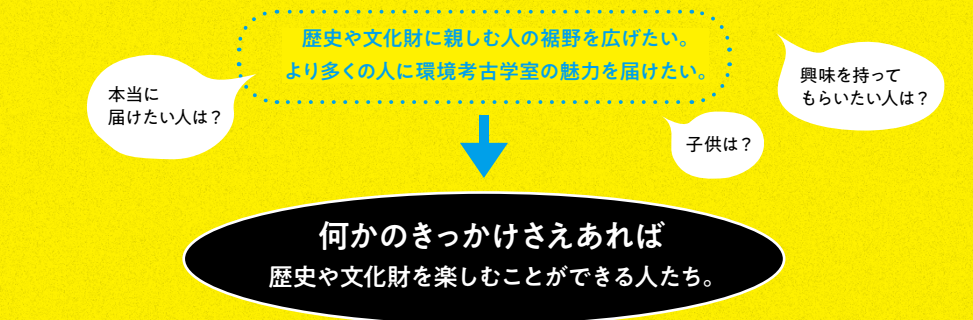
研究に関する専門的な情報を、より多くの人が理解しやすいかたちで発信することに重きを置いて検討を進めました。



Who

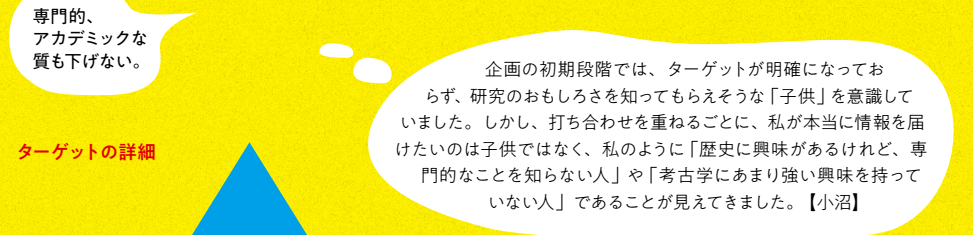
誰に届けたいのか？

飛鳥資料館の現状や、今後の文化財のあり方などを考えながら、メッセージを届けたいターゲットを絞っていきました。



文化財に親しむ「入口」となれば、
歴史や文化財を文化財に親しむ人の裾野が広がる。

すでに歴史や文化財に興味がある人たちにとっては、
研究の最前線や新しい情報を知る機会にする。
(研究の舞台裏は、歴史や考古学に詳しい人にとっても新鮮な情報となり得る。)



ターゲットの詳細

●歴史や文化財に関わろうとする人

- ・博物館によく行く人
- ・発掘調査の現地説明会によく行く人
- ・歴史や文化財などの専門書を読む人

●歴史や文化財にあまり接点のない人

- ・歴史や文化財は好きだけど、詳しく知らない人
- ・歴史に興味はあるけれど、少し距離感を感じている人
- ・歴史や文化財に強い関心を持っていない人

「歴史や文化財に関わろうとする人」と「歴史や文化財にあまり接点のない人」へのアプローチを最優先にしつつ、自然科学的な視点で骨に興味がある人が考古学的な骨の研究手法について学べ、研究員の仕事の紹介を通して、子供たちの将来の夢の選択肢が増える機会になればとも考えていました。

○ふたつの「ものがたり」を届ける——タイトルの決定。

「骨ものがたり—環境考古学研究室のお仕事」というタイトルは、展覧会のコンセプトやターゲットに合わせるため、1か月ほどかけて考えました。山崎さんが骨に関連する過去の展覧会のタイトルを調べ、それらと被らないように注意しながら、学芸室で20個以上の案を出し、そのなかから候補を絞っていきました。

展覧会のコンセプトである「わかりやすく伝えたい」という狙いと「歴史や文化財にあまり接点のない人」をメインターゲットにしたことから、展覧会のタイトルも難しい印象を与えるものは避けたいと思っていました。

いくつかの候補のなかから最終的にどれにしようか迷っていたところ、デザイナーの大溝さんから、「骨ものがたり」がキャッチーで堅苦しくなく、この展覧会で伝えたい内容（「骨の研究から見えてくる歴史の物語」と「骨を研究する舞台裏の物語」）に合っているのではないかと？というご意見をいただき、これをメインタイトルにすることに決めました。



タイトル案

「骨が語る人々の暮らし」

「骨が語る暮らし」

「骨に隠されたストーリー」

「骨ものがたり」

「雄弁な骨片たち」

「語る骨」

「骨からみえる昔の暮らし」

「骨が語る世界」

「骨が語る歴史」

→「骨が語る」に

代」というキーワードもありかも。副題で「環境考古学研究室の一」

「骨から古代を読み解く」

「骨を読み解く—動物考古学による古代へのアプローチ—」

「骨を読み解く—環境考古学研究室の●●—」

「骨から歴史を明らかにする—環境考古学研究室の挑戦—」

「骨から歴史を読み解く—環境考古学研究室のアプローチ—」

「骨を読み解く—古代の歴史を明らかにする舞台裏—」

「骨から古代を明らかにする—環境考古学研究室の舞台裏—」

「なぜ骨から歴史がわかるのか」

「なぜ動物の骨から人の歴史がわかるのか」

「なぜ骨から古代の歴史がわかるのか」

「動物の骨から人の歴史に迫る」

骨ものがたり—環境考古学研究室の舞台

骨ものがたり—環境考古学研究室のお仕事

骨ものがたり—環境考古学研究室の裏側

骨ものがたり—動物考古学研究の舞台裏

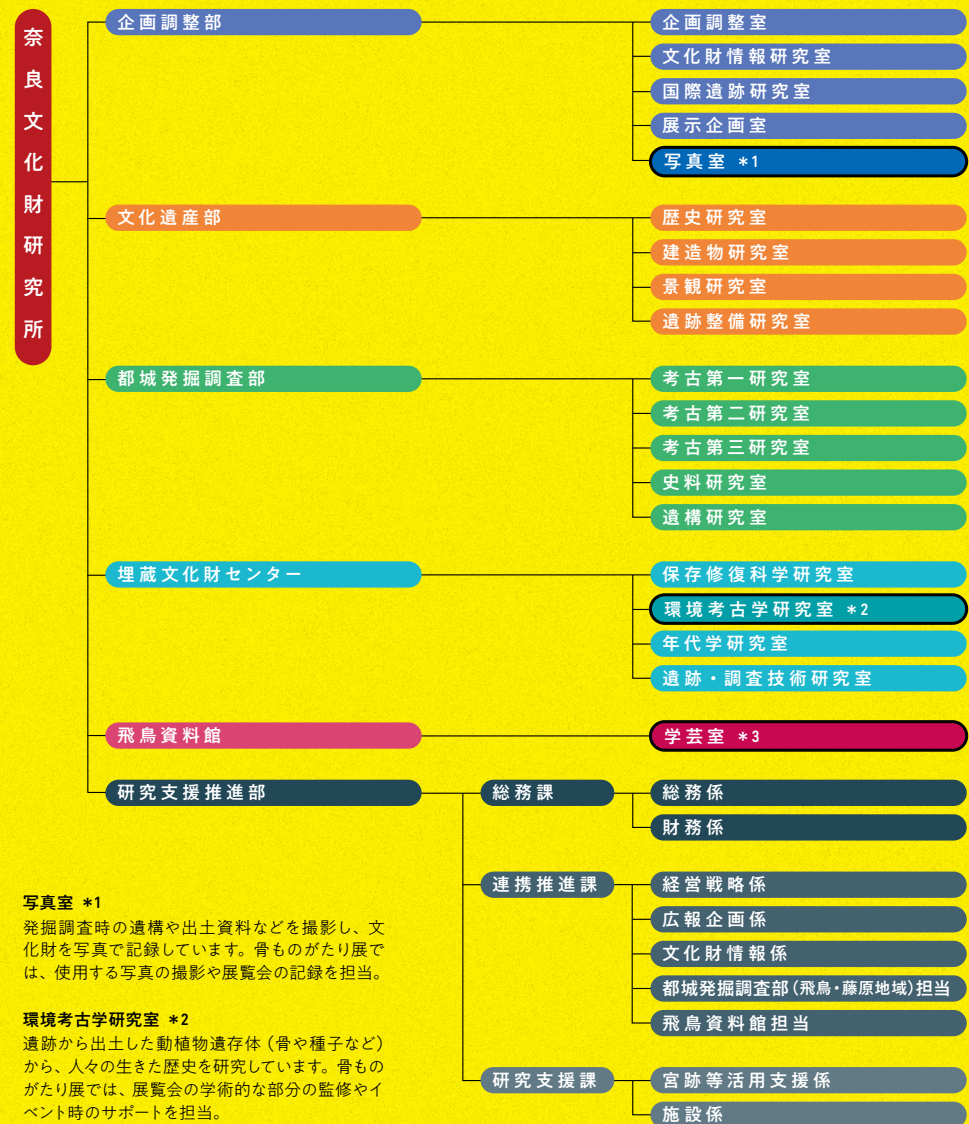
骨ものがたり—動物考古学研究の裏側—

当初は、「環境考古学研究室」という名前が一般的ではないことや、多くの人が難しくないイメージを持つのではないという懸念があり、研究室の名前をタイトルやサブタイトルに入れるない方向で検討していました。しかし、大満さんも含め打ち合わせを重ねるなかで、タイトルのどこかに「環境考古学研究室」を入れることで、研究室の存在や研究している分野について多くの人が知ってもらふべきなのではないかと考え、サブタイトルに「環境考古学研究室」を入れて「骨ものがたり—環境考古学研究室のお仕事」というタイトルが完成しました。（小沼）

骨ものがたり

○奈良文化財研究所の展示づくり。

飛鳥資料館の展覧会は私たち学芸会のメンバーだけでなく、展覧会のテーマに合わせて、研究所の他の研究室と協力してつくっています。骨ものがたり展では、飛鳥資料館 学芸会を中心に、環境考古学研究室、写真室と一緒に準備を進め、木簡などの史料は史料研究室、展示する骨の保存処理は保存科学研究室など、必要に応じてその他の研究室にもサポートをお願いしました。



写真室 *1

発掘調査時の遺構や出土資料などを撮影し、文化財を写真で記録しています。骨ものがたり展では、使用する写真の撮影や展覧会の記録を担当。

環境考古学研究室 *2

遺跡から出土した動植物遺存体（骨や種子など）から、人々の生きた歴史を研究しています。骨ものがたり展では、展覧会の学術的な部分の監修やイベント時のサポートを担当。

飛鳥資料館 学芸室 *3

展覧会やイベントの開催などを通して、発掘調査や研究の成果を発信しています。骨ものがたり展では、展覧会全体の企画・マネジメントを担当。

○ひとつのチームでつくり上げる。

展覧会は、所内だけでなく、所外のような専門分野の人の協力も重要です。ひとつのチームとして展覧会のコンセプトや完成イメージを共有し、ときにはそれぞれの専門領域の壁を飛び越えて、意見を交換していくことも重要になります。今回は早い段階から、展示・図録・広報物それぞれのイメージを共有し、迷ったときにはコンセプトに立ち返りながら準備を進めていきました。

奈良文化財研究所

飛鳥資料館 学芸室



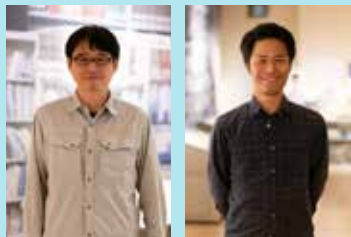
主担当：小沼

副担当：西田



石橋・若杉・辻本・美濃

環境考古学研究室



監修：山崎

サポート：松崎



サポート：山田

サポート：坂本



研究室スタッフ



写真室



撮影：飯田



所外関係者（デザイン）



グラフィックデザイン：
大溝裕（Glanz）

空間デザイン：
小西愛子

空間デザインをお願いした小西さんとは初めてのお仕事でしたが、こちらの意図を汲んだ上でいろいろなアイデアを提案していただき、何よりも展示の現場で、楽しそうに作業をされているのが印象的で、こちらまで楽しくなりました。【山崎】

史料研究室



学術的な情報の確認

考古第一研究室



資料の管理・準備

保存修復科学研究室



骨などの保存処理

都城発掘調査部



発掘調査

骨ものがたり展では、Glanzの大溝さんにグラフィックデザインをお願いしたいと決めていました。大溝さんには以前に何度かデザインを依頼したことがあり、いつもこちらの狙いや思いを大切にしながらも「こんな表現があるのか!」という新新さに驚きを受けます。今回は、今までの考古学や歴史の展覧会にはなかったような図録や展示を作りたいという挑戦的な思いもあり、新しい取り組みを成功させるために、絶対に大溝さんの力を借りたいと思っていました。【小沼】



所外関係者（展示）



資料の運搬・陳列
日本通運株式会社 関西美術品支店



展示会場の造作
株式会社カマダ工芸



マクロ模型の制作
百貨堂株式会社



展示会場のライティング
にしでん



マクロの骨やテンバコ等の借用
気仙沼市教育委員会



図録・広報物の印刷
株式会社山田写真製版所

※敬称略

タイムスケジュール

Time Schedule

